

顯けん仏ぶつ未み來らい記き

沙門しゃもん 日蓮にっぜん これを勘かんうう

法華經の第七に云く、我が滅度めつどの後のち、後のちの五百歳ごひやくさいの中に閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふして断絶せしむるなけん等云云。

予ひとたびは歎じて云く、仏滅後すでに二千二百二十余年を隔へだつ。いかなる罪業によつて仏の在世に生れず、正法しょうぼうの四依しえ、像法の中の天台伝教等にも値わざるやと。

またひとたびは喜んで云く、いかなる幸あて後五百歳に生れてこの真文を拜見することぞ。在世も無益むやくなり。前四味ぜんしの人はいまだ法華經を聞かず。正像もまた由よしなし。南三北七ならびに華嚴真言等の学者は法華經を信ぜず。

天台大師云く、後の五百歳遠く妙道うらおに沾うるわん等云云。広宣流布の時を指すか。伝教大師云く、正像やや過ぎおわつて末法はなはだ近きちかきあり等云云。

末法の始を願樂がんぎょうするの言ことばなり。時代を以て果報を論ずれば、竜樹りゅうじゆてんじん天親に超過し、天台・伝教にも勝すぐるるなり。

問うて云く、後五百歳はなんじ一人に限らず。なんぞことにこれを喜悅せしむるや。

答えて云く、法華經の第四に云く、如来の現在にすらなおんしつお怨嫉多し、いわんや滅度の後をや文。

天台大師云く、いかにいわやん未来をや、理化しがたきにあり文。

妙樂大師云く、理化しがたきにありとは、この理を明すことは、意衆いしゆう生の化しがたきを知らしむるにあり文。

智度法師云く、俗に良薬口に苦にがしと言うがごとく、この経は五乗の異執いししゆうを廢して一極いちごくの玄宗を立つ。ゆえに凡をしりぞけ、聖を呵し、大を排し小を破る。ないし、かくのごときの徒のごとく留難るなんをなす等云云。

伝教大師云く、代よを語ればすなわち像の終り末の始め、地を尋ぬれば唐の東、羯かつの西、人

を原ぬればすなわち五濁の生、鬪諍の時なり。

経に云く、猶多怨嫉、況滅度後と、この言まことにゆえあるなり等云云。この伝教大師の筆跡はその時に当るに似たれども、意は當時を指すなり。正像やや過ぎおわつて末法はなはだ近きにありの積は心あるかな。

経に云く、悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・夜叉・鳩槃荼等その便を得るなり云云。言うところの等とはこの経にまた云く、もしは夜叉、もしは羅刹、もしは餓鬼、もしは富单那、もしは吉遮、もしは毗陀羅、もしは犍駄、もしは烏摩勒伽、もしは阿跋摩羅、もしは夜叉吉遮、もしは人吉遮等云云。この文のごときは、先生に四味・三教ないし外道、人天等の法を持得して、今生に悪魔・諸天・諸人等の身を受けたる者、円実の行者を見聞して留難を至すべき由を説くなり。

疑て云く、正像の二時を末法に相對するに、時と機とともに正・像はことに勝るるなり。なんぞその時機を捨ててひとえに當時を指すや。

答えて云く、仏意測りがたし。予いまだこれを得ざれども、試みに一義を案じ小乗経を以つてこれを勘うるに、正法千年は教行証の三つ具さにこれを備う。像法千年には教行のみあつて証なし。末法には教のみあつて行証なし等云云。

法華経を以つてこれを探るに、正法千年に三事を具するは、在世において法華経に結縁する者、その後、正法に生れて小乗の教行を以つて縁となして小乗の証を得るなり。像法においては在世の結縁微薄のゆえに、小乗において証することなく、この人、権大乘を以つて縁となして十方の浄土に生ず。末法においては、大小の益ともにこれなし。小乗には教のみあつて行証なし。大乘には教行のみあつて冥・頭の証これなし。

その上、正像の時、所立の権・小の二宗漸漸末法に入つて執心強盛にして、小を以つて大を打ち、権を以つて実を破り、国土に大体謗法の者充滿するなり。仏教に依つて悪道に墮する者、大地の微塵よりも多く、正法を行じて仏道を得る者、爪上の土よりも少し。この時に當つて諸天善神その国を捨離し、ただ邪天・邪鬼等あつて王臣・比丘・比丘尼等の

身心に入住し、法華經の行者を罵詈毀辱せしむべき時なり。

しかりといえども、仏の滅後において四味・三教等の邪執を捨て実大乘の法華經に帰せば、諸天善神ならびに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せん。この人は守護の力を得て本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以つて閻浮提に広宣流布せしめんか。

例せば威音王仏の像法の時、不輕菩薩、我深敬等の二十四字を以つてかの土に広宣流布し、一国の杖木等の大難を招きしがごとし。かの二十四字とこの五字と、その語ことなりといえども、その意これ同じ。かの像法の末とこの末法の初と全く同じ。かの不輕菩薩は初隨喜の人、日蓮は名字の凡夫なり。

疑つて云く、なにを以つてこれを知る、なんじを末法の初の法華經の行者なりとなすことを。

答えて云く、法華經に云く、いわんや滅度の後をや。また云く、もろもろの無智の人あつて悪口罵詈等し、および刀杖を加うる者あらん。また云く、しばしば擯出せられん。また

云く、一切世間怨多くして信じがたし。また云く、杖木瓦石もてこれを打擲す。また云く、悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等その便を得ん等云云。

この明鏡について仏語を信ぜしめんがために、日本国中の王臣・四衆の面目に引き向かえたるに、予の外には一人もこれなし。時を論ずれば末法の初め一定なり。しかるあいだもし日蓮なくんば仏語虚妄とならん。

難じて云く、なんじは大慢の法師にして大天に過ぎ、四禅比丘にも超えたり、いかん。

答えて云く、なんじ日蓮を蔑如するの重罪はまだ提婆達多に過ぎ、無垢論師にも超えたり。

我が言は大慢に似たれども、仏記を扶け如来の実語を顕さんがためなり。しかりといえども日本国中に日蓮を除き去つては、誰人を取り出して法華経の行者とせん。なんじ日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす。あに大悪人にあらずや。

疑つて云く、如来の未来記はなんじに相当るとして、ただし五天竺ならびに漢土等にも法華経の行者これあるかいかん。

答えて云く、四天下の中に全く二日なし。四海の内にあに両主あらんや。

疑つて云く、何を以つてなんじこれを知るや。

答えて云く、月は西より出でて東を照し、日は東より出でて西を照す。仏法もまた以つてかくのごとし。正像には西より東に向い、末法には東より西に往く。

妙樂大師みょうらく云く、あに中国に法を失つてこれを四維しゐに求むるにあらずや等云云。天竺に仏法なき証文なり。

漢土においては高宗皇帝こうそうの時、北狄ほくてき、東京とうきんを領して今に一百五十余年、仏法・王法ともに尽きおわんぬ。漢土の大蔵の中に小乗経は一向これなく、大乘経は多分これを失す。日本より寂照じやくしやう等少々これを渡す。しかりといえども伝持の人なければ、なお木石ぼくせきの衣鉢えはつを帯持せるがごとし。

ゆえに遵式じゆんしきの云く、始西より伝う、月の生ずるがごとし。今また東より返る、なお日の昇るがごとし等云云。これ等の釈のごとくんば天竺・漢土において仏法を失せること勿論

なり。

問うて云く、月氏がっし・漢土において仏法なきはこれを知れり。東・西・北の三州に仏法なき事は何を以つてこれを知る。

答えて云く、法華經の第八に云く、如来の滅後において、閻浮提えんぶだいの内にうち広く流布せしめて断絶せざらしめん等云云。内の字は三州を嫌う文なり。

問うて云く、仏記すでにかくのごとし。なんじが未来記はいかん。

答えて曰く、仏記ぶつぎに順じてこれを勘うるにすでに後五百歳の始に相当あいあたれり。仏法必ず東土の日本より出づべきなり。その前相ぜんそう必ず正像に超過せる天変地天てんべんちようこれあるか。

いわゆる仏生の時、転法輪てんぼうりんの時、入涅槃にゅうねはんの時、吉瑞きちずい・凶瑞きようずいともに前後に絶えたる大瑞なり。仏はこれ聖人の本なり。経々の文を見るに仏の御誕生の時ごしきは、五色ごしきの光氣こうき四方に遍あまねくして夜も昼のごとし。仏御入滅の時はくごうには十二の白虹はくこう南北に亘わたり、大日輪光だいにりんこうなくして闇夜のごとくなりし。その後正像二千年の間、内外の聖人生滅しやうめつあれども、この大瑞だいにずいにはしか

ず。

しかるに去ぬる正嘉年中より、今年に至るまで、或は大地震、或は大天変、あたかも仏陀の生滅の時のごとし。まさに知るべし、仏のごとき聖人生れたまわんか。滅したまわんか。大虚に亘つて大彗星出づ、誰の王臣を以つてこれに対せん。大地を傾動して三たび振裂す。いずれの聖賢を以つてこれを課せん。まさに知るべし、通途の世間の吉凶の大瑞にあらざるべし。これ偏にこの大法興廢の大瑞なり。

天台云く、雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛なるを見て池の深きを知る等云云。妙楽云く、智人は起りを知り、蛇はみずから蛇を識る等云云。

日蓮この道理を存じてすでに二十一年なり。日來の災・月來の難、この兩三年の間の事すでに死罪におよぼんとす。今年今月、万が一も身命を脱れがたきなり。世の人疑いあらば、委細の事は弟子にこれを問え。

幸なるかな、一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ。悦ばしいかな、いまだ見聞せざる

教主釈尊に待つかえ奉らんことよ。

願ねがわくは我われを損こざる国主等をば最初にこれを導みかん。我われを扶たすくる弟子等をば釈尊にこれを申まさん。我われを生なめる父母等には、いまだ死しせざる已い前にこの大善だいぜんを進すすめん。

ただし今、夢のごとく宝塔品ほうとうほんの心を得たり。この経きやうに云く、もし須弥しゆみを接つつて他方無数の仏土ぶつちに擲なげ置おかんも、まだいまだこれかたしとせず。ないし若もし仏の滅後めつごに悪世あくせいの中なかにおいてよくこの経きやうを説せかん、これすなわちこれかたし等云云。

伝教大師でんきやうだいし云く、浅あさきは易やすく、深ふかきはかたしとは釈迦しやくかの所判しよはんなり。浅あさきを去さつて深ふかきに就つくは丈夫じやうぶの心こころなり。

天台大師たいたいだいしは釈迦しやくかに信順しんじゆんし法華宗ほふくわしゆを助すけけて震旦しんたんに敷揚ふきやうし、叡山えいざんの一家いっけは天台たいたいに相承さうじやうし法華宗ほふくわしゆを助すけけて日本にっぽんに弘通くわうつうす等云云。

安州あんしゆちうの日蓮にっれんは恐おそらくは三師さんしに相承さうじやうし法華宗ほふくわしゆを助すけけて末法まつぽうに流通りゆうつうす。三さんに一いつを加くわえて三國さんこく四師しよしと号なづづく。

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

文永十年（太歳癸酉）みずのととり後のちの五月十一日

桑門 日蓮これをしる記す